

もり おか 森 岡 遺 跡

位置と経過

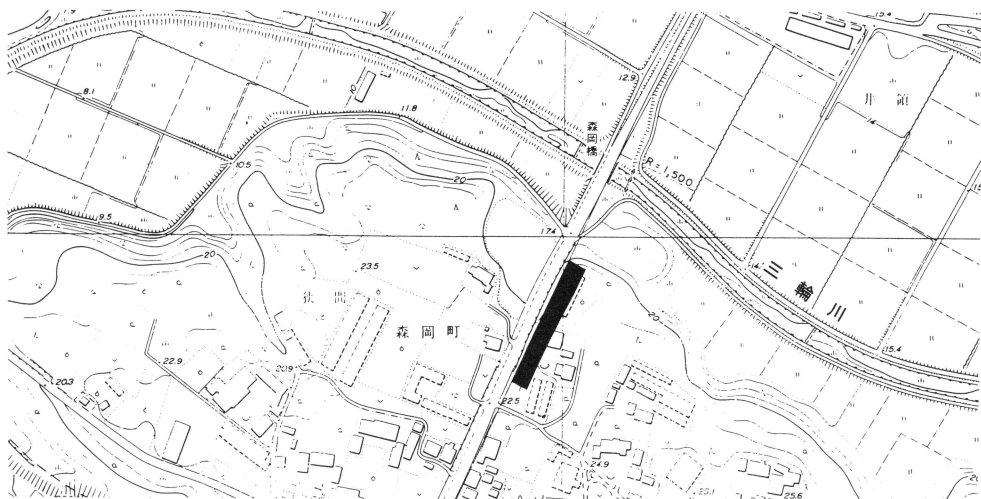
森岡遺跡は豊橋市森岡町に所在し、豊川左岸の南北に延びる河岸段丘上に位置する。標高は24mを測り、調査区北側には豊川支流の神田川・三輪川による浸食谷が展開している。本遺跡の立地する段丘上にはいくつかの遺跡がみられ、調査区北側に弥生後期の高井遺跡、西側に古墳時代の集落が確認された浪ノ上遺跡があり、さらに周辺には当遺跡も含め、馬越北山古墳群、瀬戸古墳群等群集墳も多く存在する。今回の調査は東三河環状線建設に伴う事前調査として実施したもので、調査面積は1000㎡である。

調査の概要

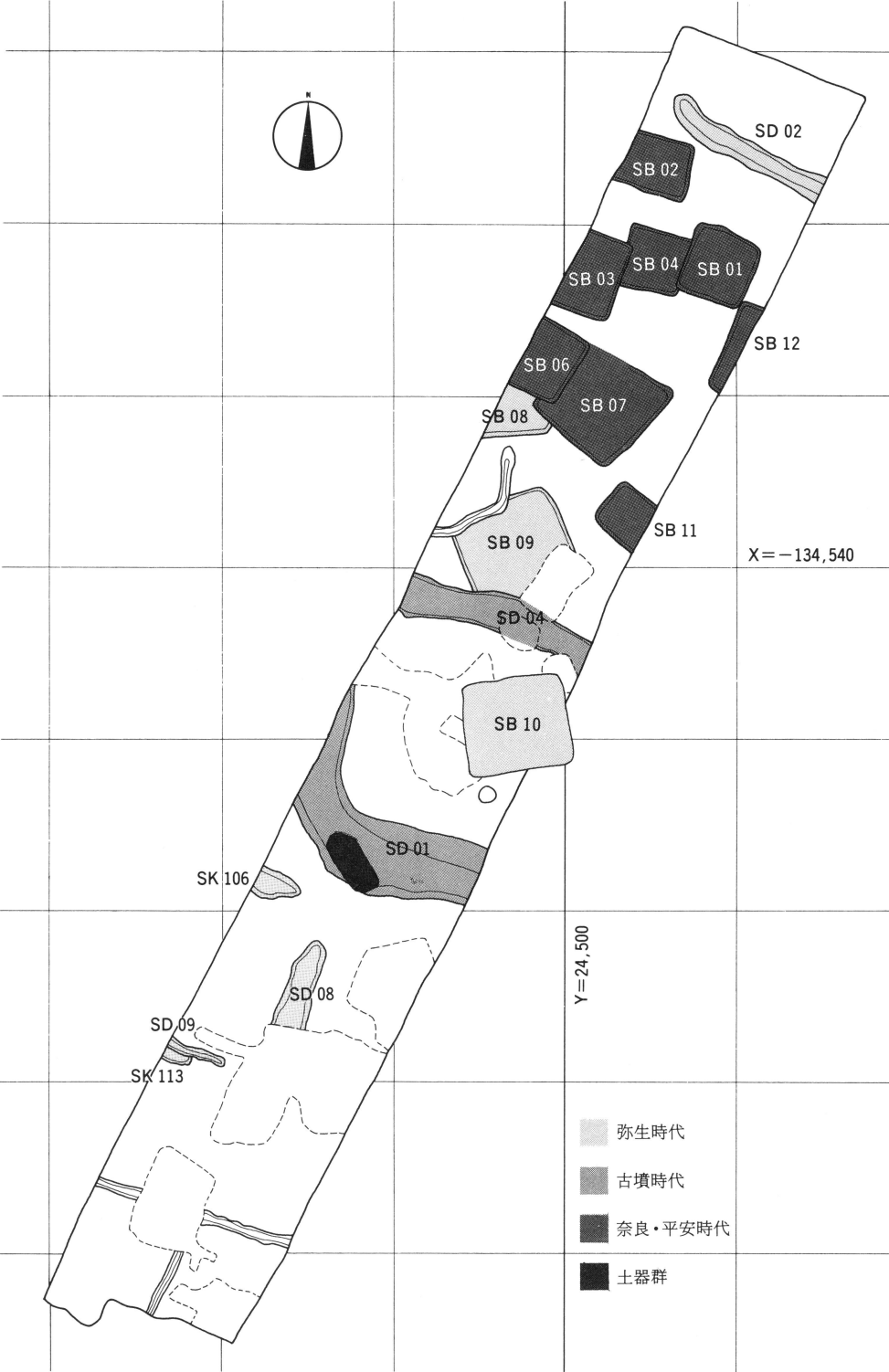
調査区の基本層序は、Ⅰ：旧耕作土、Ⅱ：灰褐色土、Ⅲ：黄白色土（基盤）である。しかし、果樹栽培や宅地造成のための削平、攪乱をうけており、遺構の遺存状態は必ずしも良好ではなかった。古墳の有無を主眼として調査を行った結果、四時期に大別しうる遺構・遺物を検出した。以下時期ごとにその概略を述べていく。



調査区遠景



第1図 調査区位置図（1/5000）



第 2 図 遺構配置図 (1 / 400)

坑を検出した。竪穴住居はいずれも掘肩が浅く、周溝・柱穴等是不明瞭であった。規模は一辺5～6mを測る隅丸方形で、方位を北西に振る。SB10に関しては、攪乱により規模等一切不明であるが、一括遺物の出土（第3図－7・8）、炉跡と思われる焼土塊の検出により住居跡と認定した。溝、土坑では、方形周溝墓の可能性をもつSD08－SK106－SK113（SD09）が注目される。いずれの遺構からも弥生時代中期の遺物が出土している。

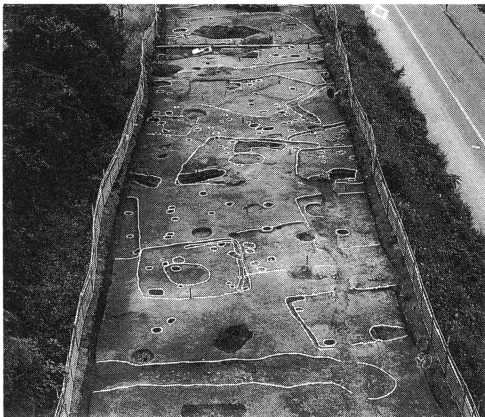
古墳時代 主な遺構・遺物として、一辺15m程度の方墳を想定しうる溝2条とそこから出土した一群の土師器をあげることができる。SD01は幅4m、深さ40cmを測り、調査区中央で北へL字状に屈曲する。この溝と同時期と思われるSD04は、幅約2m、深さ20cmで、後世の削平により溝の底部のみが遺されていた。主な遺物はSD01から出土しており、土師器を中心とし、個体数にして100個体を越える。器種としては土師器の甕がその大半を占め、次いで壺、高杯、さらに甑や若干の須恵器がみられる。時期はおおむね六世紀前半代と思われる。出土状態は溝の屈曲部に二つのブロックに分けて、意図的に配置された感があり、単なる一括投棄とは考えにくい。また、甕・壺・高杯がセット関係で重ね置きされていたことも想定される。但し、土師器、須恵器ともに、成形・焼成の不良なものが多く、器面の磨滅も著しい。（第3図－4・5・6）

奈良～平安時代 竪穴住居が8軒検出された。一辺3～5mの方形をなし、方位を北東に振っている。住居北壁中央に焼土塊を伴うものが3軒（SB01・02・07）あり、カマドを設けていたと思われる。出土遺物は土師器甕、灰釉陶器皿が中心である。（第3図－1・2・3）

鎌倉時代 伊勢型鍋、灰釉系陶器が出土した土坑を検出した。

まとめ

今回の調査において直接的には古墳を確認することはできなかった。しかし、SD01より



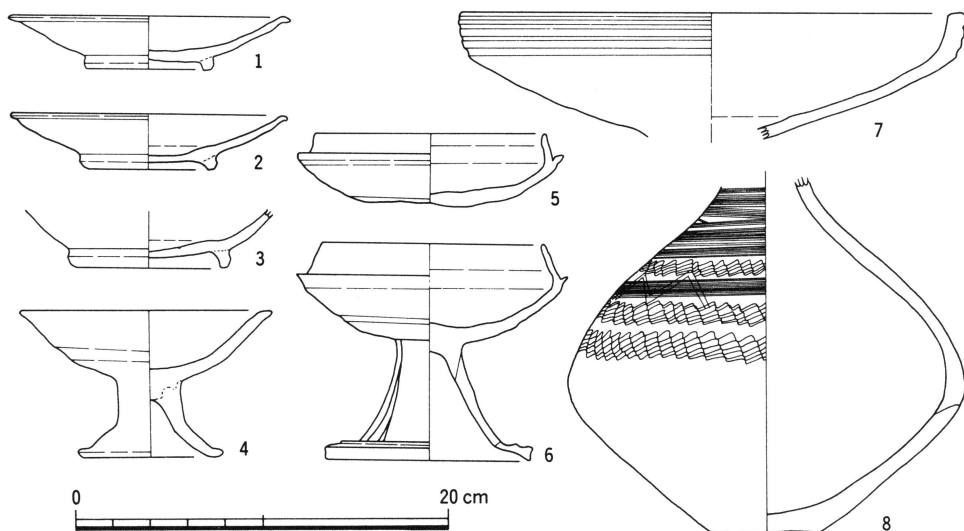
調査区全景（北より）



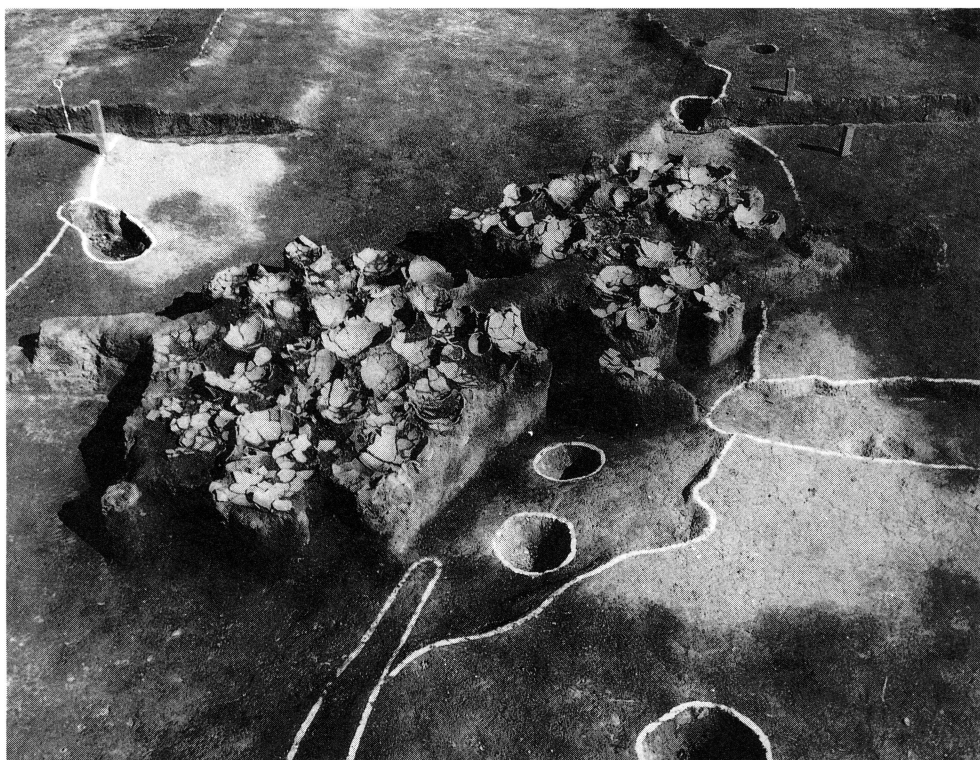
調査区全景（南より）

出土した一群の土器は従来研究の空白の観のある東三河地方の6世紀前半代の土師器の編年研究及び、(古墳とすれば)葬制研究の上で貴重な手掛りを与えるものとする。

(川井啓介)



第3図 出土遺物 (1/4)



SD01 遺物出土状態